

拠点校の事業実施報告書

拠点校名：大垣市立中川小学校

1 年間スケジュールに基づいて実施した事業経過

月	取組内容	研究内容
4	・研究構想、研究組織、研究内容、研修計画の作成 ・研究部会で内容、役割の共通理解	指導計画・指導過程の工夫 ・児童の発達段階と実態を踏まえ、付けたい力を具体化した指導計画の工夫・改善
5	・全校研究会 及び学年部研究会 の実施	・課題設定、学習活動、評価を一貫した学習過程の工夫
6	・学年部研究会 の実施	
7	・全校研究会 及び学年部研究会 の実施	
8	・1学期の振り返り（指導計画の練り直し等） ・環境整備	活動、教材の工夫 ・楽しく英語に慣れ親しむ活動の工夫・改善
9	・2学期の重点の共通理解	・楽しく英語に慣れ親しむ教材の工夫・改善
10	・全校研究会 の実施	
11	・「中川小フェスティバル」の実施（交流活動のまとめとして） ・先進校視察（11/22 千葉県）	交流活動の工夫 ・中川小フェスティバルの充実 ・ICT活用
12	・2学期の振り返り（指導計画の練り直し等） ・環境整備 ・先進校視察（12/14 京都市）	
1	・研究のまとめ、及び実践交流会と自主公表会に向けた準備	自他を認め合う聞き方、話し方の指導
2	・自主公表会の実施 ・拠点校における実践交流会の実施 ・県における拠点校連絡協議会への出席	
3	・次年度の研究構想の立案	
<p>< 研究の具体 ></p> <p>仮説に基づき、全学級担任が研究授業を行い、学年・学年部研究会で、目標の具現を検証した。（1～2学期）</p> <p>研究のまとめとして公表会及び拠点校における実践交流会を実施し、研究の成果を公表した。（3学期）</p>		

2 本校における取組の具体的な内容

(1) 教員の指導力の向上のための取組について

職員研修「スタッフ・ファンタイム」による模擬授業

毎月2回、各学年輪番で、担当学年のカリキュラムをもとに実施した。この研修の効果は次の通りである。

- ・授業展開の仕方や指導・援助で大切にすべきこと、教材・教具を作成する際のポイントとその活用の仕方等の研究を深めることができた。
- ・ALTの協力のもと、クラスルーム・イングリッシュ等、教師が授業を進める際に使用したい(使用することが望ましい)英語表現を学ぶ機会になった。
- ・教職員全員で英語活動を推進していくという意識の向上と、教職員同士の連携強化につながった。

小学校英語のような新たな取組を行う場合、教職員の創意と総意を結集する必要がある。「スタッフ・ファンタイム」のような参加体験型の研修は、大変意義深いと感じている。

全校研究会や学年部研究会における指導案検討

学年部研究会として、毎週、各学年会で、次週行う英語の授業の指導案検討を行った。また、授業前日に、学年所属の教職員全員で、教室環境づくり、教材・教具の準備、授業を進める上でのポイント等の確認を行った。

教職員全員が主体的に指導案検討及び実践に参画したことにより、全校研究会、学年部研究会で、研究の視点にそって活発な討議を行うことができた。「みんなで創りあげよう」とする意識のもとで展開された授業研究は、学年や学校の教職員間の凝集度を高め、結束を強めることに寄与したと考えている。

(2) 効果的な指導方法の工夫・改善について

指導過程、教材・教具の工夫・改善

- ・全校研究会、学年部研究会、学年研究会等の授業研究を中心に、付けたい力の具体化、目標と指導と評価の一貫した学習過程の在り方、「学び合い」の位置付けと評価の在り方について、工夫・改善を試みた。
- ・言語材料に無理なく慣れ親しむことや、英語を使って仲間とやりとりをする心地よさを味わうことをめざして、言語活動や教材・教具の工夫・改善に取り組んだ。
- ・学習を成立、充実させるために必要となる「聞く、話す」に関わる基本的な学習姿勢づくりを大切に、そのための指導を継続して行った。

校内放送「ファンタイム」の工夫・改善

日常生活において児童にとって使用頻度が高いと思われる言語材料に慣れ親

しむことを目的として、校内放送「ファンタイム」を次の通り活用して指導を行った。

- ・「Today's Saying」のショートスキットを児童やA L Tの協力を得ながら作成して放映し、「言語の働き」と「使用場面」を児童が理解できるようにした。
- ・「Today's Saying」を、「今日の一言」として、毎日一つずつ各教室に掲示した。
- ・NHK テレビ番組「えいごリアン」で取り上げられている言語材料を、本校の児童の実態に合わせて「Today's Saying」で取り上げ、児童のショートスキットと「えいごリアン」を続けて放映した。

(3) A L Tや地域人材等の効果的な活用について

人材の確保

- ・A L Tについて、市から派遣されているA L T以外に、P T Aの協力を得て、毎日1名以上のA L Tが来校できるよう努力してきた。
- ・地域講師について、P T Aが「地域人材を育てる英語教室」を開催し、参加者の中から講師を依頼した。英語教室は、週1回2時間程度、英語表現や諸外国の文化の理解を図る研修を実施した。

指導者の役割分担

授業に当たっては、次のように指導者の役割を明確にして、効果的な指導・援助を行うことができるように努めてきた。

	中心となる評価の観点	指導・援助や評価の観点の具体
学級担任	コミュニケーションへの関心・意欲・態度 学級経営を踏まえ、温かい人間関係の醸成を図ることにつながる態度を価値付ける。	児童の学校生活全体を見渡し、以前と比べてよく努力している児童や、それを支えている仲間の姿等を認める。
地域講師	聞くこと 相手の目を見ながら聞く、うなずきながら聞く、分からないことは尋ねながら聞くなどのよさを価値付ける。	話し手の話す内容をよく聞きとろうとしていた児童、相手に自分の理解の程度を示しながら聞いていた児童等を認める。
A L T	話すこと はっきりと聞こえる声で話す、伝えるために自然な身振りを付けながら話すなどのよさを価値付ける。	明瞭な音声で話すことができている児童、場にふさわしいジェスチャーを使って伝えていた児童、スキットの定型表現だけでなく場に応じて適切な表現を選んで使うことができている児童等を認める。

学級担任との打ち合わせ

次のことについて、ALT や地域講師に連絡及び依頼した。

- ・「Today's Topic」(授業でALT が英語で話す時間) の内容
- ・「Today's Topic」で使用する写真や具体物の準備
- ・「中心活動」で行う対話の内容
- ・評価の分担 (誰が、どんな姿を示していた児童を評価するのか)

打ち合わせ方法は、メールやFAXで行うこと、前週に来校の折りに話し合うこと、当日の中休みや昼休み等を利用して打ち合わせることがある。

(4) 児童の興味・関心等学習状況の変容の把握について

意識調査

- ・学期に1回アンケートを実施し、英語の授業や英語の授業で行う諸活動についての意識等を調査した。

机列表

- ・学級担任が、毎時間の英語の授業で行う言語活動への児童の取組状況を、評価の観点別に机列表に記入し、その記録を蓄積した。

自己評価カード

- ・児童が評価の観点ごとに振り返りを記入するカードを、学級担任が毎時間回収して児童の意識の変容を把握した。

(5) その他 (中学校との連携、ITCの効果的な活用等について)

中学校との連携

- ・以下の点において小学校とのつながりを意識した授業実践が行われるように、小中兼務教員を通して校区の中学校に働きかけを行った。

ア、指導過程

過程	小学校	中学校
導入	歌、トピック、課題設定	Warm-Up ・歌やALT-Talk等を位置付ける。 ・Oral interactive introductionにて、必然性のある課題を設定する。
展開	チャンツ、中心活動	コミュニカティブな授業展開 ・口頭練習に変化をもたせ、生徒が繰り返しの練習に飽きることなく取り組めるようにする。 ・単元の指導構想の明確にもち、前後の授業とのつながりを考慮して言語活動を設定する。
終末	振り返り	英語による相互評価・自己評価、教師の評価

イ、教材

小学校で使用している教材（歌、絵カード等）を、中学校でも積極的に使用してきた。

ウ、評価の観点

小学校で培ってきた素地が生かされるよう、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度について、中学校では常に相互評価し合っていくこととして位置付けた。

ICTの活用

- ・オーストラリアの交流校と写真、手紙、作品を交換した。
- ・6年生児童が修学旅行先で交流した外国の方とメール交換した。

3 本校における取組の成果等

(1) 成果

- ・「学級担任として英語活動にどう取り組むのか」に主眼を置き、学級担任の役割を明らかにして「拠点校における実践交流会」に提案することができた。拠点区の学校に、これからの英語活動は、学級担任が主導していくものであり、そのためには校内体制の整備が必要であることを方向付けることができた。
- ・単元指導計画を見直し、言語材料の精選を行ったり、ペアやグループでの練習方法を工夫したりすることで、無理なく言語材料に慣れ親しみ、仲間と楽しく活動する児童が増えた。ペアやグループを生かした学び合いや相互評価を工夫することで、仲間とかかわり合いながら学ぼうとする児童の意欲が高まった。
- ・単位時間における課題設定、「アドバイスタイム」、評価の場をつなぐ試みによって、目標、指導、評価の一貫性が図られ、児童にとって学ぶ必然性のある活動をつくり出すことができた。
- ・英語活動についての意識調査や「ふりかえりカード」等から、児童が喜びとしていることやつまづいていることを把握し、実態把握に基づいた指導・援助により、児童の活動への自信を高めることができた。

(2) 課題

- ・言語材料の定着だけではなく「付けたい力」に基づいて目指す児童のコミュニケーションの姿を具体化する必要がある。児童の実態に合わせて、さらなる指導計画の見直しや言語材料の精選を行っていく。
- ・児童が自然に言語に慣れ親しむ学習過程をさらに工夫する必要がある。「学び合い」のよさを実感できる児童が増えているので、発達段階に応じて「学び合い」の内容や方法を深めていきたい。また、児童の意識を把握する方法をさら

に工夫したい。

- ・同じ拠点区の中でも、地域や学校によって児童の外国語学習の経験の違いが大きいことが分かった。拠点校として、各学校のこれまでの取組の程度や実情に合った提案の在り方を考えていく必要がある。